

平成 20 年度九州地域環境政策ビジョン基礎検討業務

報 告 書

平成 2 1 年 3 月

環境省九州地方環境事務所
中外テクノス株式会社

目 次

第1章 本調査の概要・目的について	1
第2章 個別事例調査	3
○福岡県福岡市 株式会社マインドシェア 養父信夫さん 【農山漁村の魅力がぎっしり！ ～マチとムラを繋げる～】	5
○大分県宇佐市 NPO法人安心院グリーンツーリズム研究会 宮田静一さん 【全国に唯一「心」が真ん中にある町 その気持ちを大切にしたい】	9
○長崎県平戸市 国際交流・野外教育コーディネーター 小関哲さん 【エコツーリズムへのコーディネート 自分が楽しくなければ客も楽しくない！】	12
○福岡県大木町 おおき循環センターくるるん 境公雄さん 【農業がさかんな町で生ゴミを活かす！ 循環システムの確立を】	15
○熊本県阿蘇市 阿蘇地域振興デザインセンター 坂元英俊さん 【阿蘇の地域デザイン ゆっくり・のんびり阿蘇大陸】	19
○熊本県氷川町 宮原好きネット 岩本剛さん 【若い力がまちづくりの中心！ 全国に広がる応援団ネットワーク】	22
○熊本県人吉市 ひまわり亭 本田節さん 【「食」のエコツーリズム こだわりは「もったいない」と「地産地消」】	24
○鹿児島県鹿児島市 NPO法人桜島ミュージアム 福島大輔さん 【島まるごとエコツーリズム 桜島をまるごと博物館に！】	26

第 1 章 本報告書の概要・目的について

第1章 本調査の概要・目的について

1 業務の目的

平成17年10月に設置された地方環境事務所においては、環境政策を各ブロックの現場で展開する拠点として、地域の特性を踏まえた自立的な環境行政を推進するための取組が求められている。

これを受け、九州地域において優先的に取り組むべき環境政策に関する横断的課題を整理することにより、総合的な環境政策ビジョン（以下「ビジョン」という。）策定の検討に資することを目的とし、平成19年度にビジョンの基礎検討業務として九州各地域における環境関係のデータの収集を行った。

昨今の地域の高齢化や経済的な疲弊の状況を踏まえれば、今後地域・自治体レベルで環境対策を実施していくに当たっては、環境保全だけでなく、行政や民間におけるパートナーシップの構築や地域の「誇り」を復活させること等を通じて「地域の経済や社会も元気にしていく」視点の重要性が増してくると思われる。

このことを踏まえ、九州地方の地域コミュニティの活性化などに焦点を当て、九州地域において地域活性化及び環境への取組に好循環を持たせている地域の実例を収集し、地域の傾向や今後の課題を洗い出すことで、来年度以降の地域の環境政策の司令塔たる九州地方環境事務所の政策の検討に資することを目的とする。

2 調査の内容

地域の自然環境その他の資源を活かした地域づくりを行っている地域について、その取組によって得られたパートナーシップや自然資源の重要性を環境保全の取組へとつなげている事例を収集

市町村やNPO等、地域の主体が中心となって、地域の核となる資源（自然環境や文化など）を活用して地域の活性化に努めるとともに当該資源及び地域の基盤となっている環境の保全につなげている地域の洗い出しを行うとともに、取組の核となっている人物に対し、直接インタビューを行った。

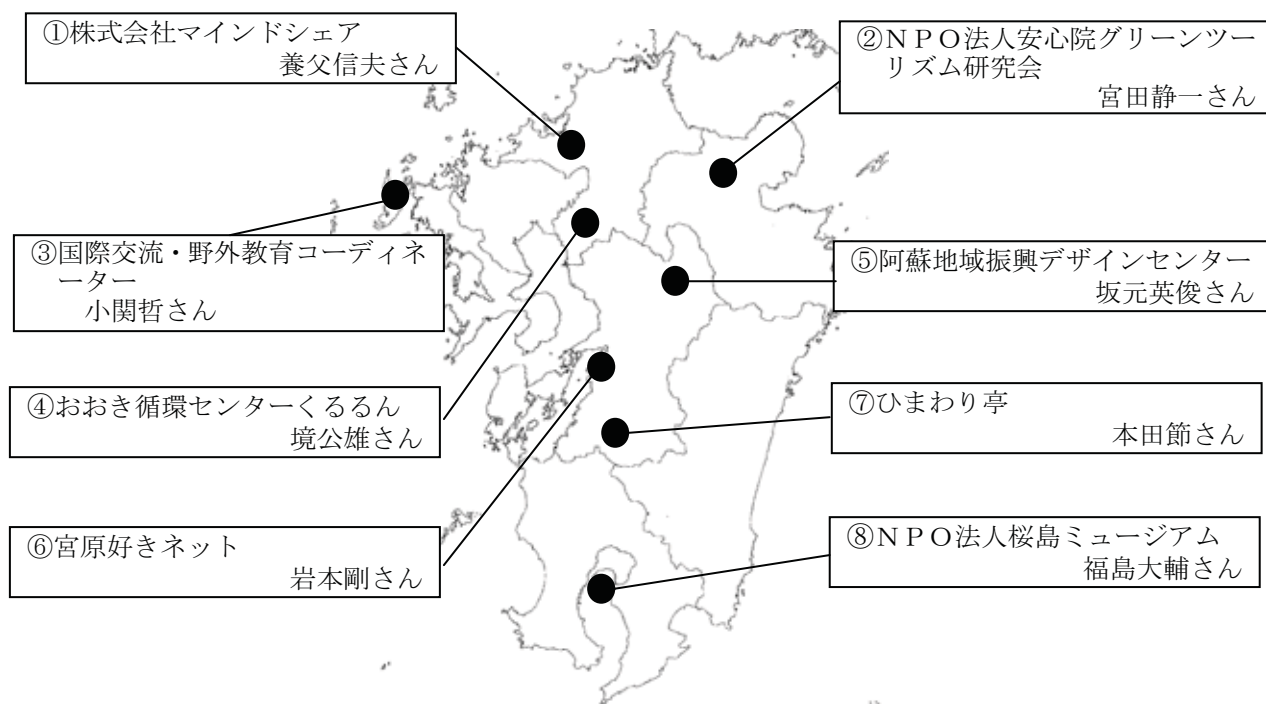
第 2 章 個別事例調査

第2章 個別事例調査

ここでは、地域コミュニティの活性化と環境保全に関し、廃棄物対策や農村・里山地域の活性化など、先進的な取り組み地域について中心となっている人物を取材し、その結果を整理した。取材した個別事例調査は、以下に示す8カ所である。

● 個別事例調査一覧

- ① 福岡県福岡市 株式会社マインドシェア 養父信夫さん
- ② 大分県宇佐市 NPO法人安心院グリーンツーリズム研究会 宮田静一さん
- ③ 長崎県平戸市 国際交流・野外教育コーディネーター 小関哲さん
- ④ 福岡県大木町 おおき循環センターくるるん 境公雄さん
- ⑤ 熊本県阿蘇市 阿蘇地域振興デザインセンター 坂元英俊さん
- ⑥ 熊本県氷川町 宮原好きネット 岩本剛さん
- ⑦ 熊本県人吉市 ひまわり亭 本田節さん
- ⑧ 鹿児島県鹿児島市 NPO法人桜島ミュージアム 福島大輔さん



◆取材担当（聞き手）プロフィール

聞き手：鈴木 順一郎

昭和34年生まれ

ディレクター・カメラマン

エコツーリズムコーディネーター

民放において政府広報番組を25年にわたって制作。

その後、環境映像を多数製作。

エコツーリズム推進法検討委員・エコツーリズム推進に関わる。

2005年・2006年・2007年・2008年環境省環境研究研修所講師。



九州・地域活性のキーパーソン

福岡県福岡市 株式会社マインドシェア

九州のムラへ行こう 編集長 養父信夫さん

農山漁村の魅力がぎゅーり！
～マチとムラを繋げる～

九州のムラへ行こう 編集長 養父信夫

1962年生まれ。福岡県宗像郡大島村玄海町出身。86年、九州大学法学部法律学科卒。(株)リクルート入社。98年に独立(株)九州観光研究所設立。都市と農村をつなぐグリーンツーリズムを広げる活動を開始。現在「九州のムラへ行こう」編集長として、地域に生きる人々の暮らしを中心に取材、ムラとマチを繋げる

農山漁村の魅力を都市部に伝える雑誌「九州のムラへ行こう」。観光雑誌や観光情報誌とは異なり、普通の地域の、普通の人々の暮らし、その地域の風土、風景、風習、風俗、風格、風味、風情といった「風」をマチの人々に伝える。一貫してマチとムラとの交流＝グリーンツーリズムを応援し、九州での取り組みを取材し紹介している。「ムラの生命をマチの暮らしに、マチの活力をムラの生業に」というのが、雑誌づくり地域づくりの基本理念。今回は編集長、養父さんに、九州における地域活性の可能性について伺った。

九州におけるエコと グリーンツーリズムの距離

まずグリーンツーリズムとエコツーリズム。よく仲間内でも議論するんですけど、九州の場合、極めて近いぞと思いますね。

結局手付かずの自然をローインパクトの中で案内するというよりも、基本、農村で暮らす人たちが、そこで生業をやることによって守られる自然環境。そこがツーリズムのひとつの舞台になっていくということで、九州の場合、離島などを除き手付かずの自然は少なく、必ずどこかの農村の村人の手が入ってるんですね。だからそう考えれば極めて九州でのエコツーリズムとグリーンツーリズムって、必然的に近くなっていくんだと思います。

例えば、阿蘇、あそこのエコツーリズム自然案内人協会の人達が8万年前の火砕流が固まったところが川をなして、そこを案内するようなツアーをやってらっしゃるんですけど、あれも、手付かずの自然っていったら自然なんだけども、実は、それをガイドする人たちは、そこで牧場や酪農をやることによって生きていらっしゃる人たちなんですよ。その人たちが管理するエリア、村の共有の土地を、フィールドとしてそこで展開していきますよということなんです。

あれは、自然のほうから見ればエコツーリズムだけども、彼らの担い手のほうから、受け入れる人から見ると、グリーンツーリズムなんです。だからそういう意味でいくと九州って極めて、エコツーリズムとグリーンツーリズムは省庁によって言葉が違ってだけで、基本は一緒なんですよね。

ですからグリーンツーリズム、エコツーリズムって分ける必要はあまりなくて「ツーリズム」という概念の中で言っちゃってもいいかなと思っていますね。

それは省庁によって、グリーンツーリズムという言い方なのかエコツーリズムって言い方なのかと思います。

今必要なのは、 コーディネートできる人材！

その地域に根をおろして、このツーリズム関係エコツーリズムもグリーンツーリズムもそうなんですけど、コーディネートできる人材がいないんですよ。で、今、九州のグリーンツーリズムの状況も、点としては、例えば農家民宿がある、農家レストランがある、農作物直売所がある。直売所も平均すると6000～7000万円くらい売り上げがあるぞと。レストランも人気のところがあるぞと。ところがそこが拠点となってもうちょっと周辺の集落を巻き込んでですね、地域の六次産業化を進めていくための、組織と人材が今、いないんですよ。

多分それはエコツーリズムの世界も一緒だと思います。結構、補助事業がある間は何とか動いているけども、補助金がなくなった瞬間に、人も入らないし、その事業を、町の人たちも受け入れられなくなるということになってしまいます。

そういう意味でいくと、点としては、グリーンツーリズムのほうがある程度、皆さん、農家民宿として立ち上がってきたぞとか、農産物直売所も例の中国の餃子問題から、新しいマーケットも広がって、さらに風が吹いてるぞと。農家レストランも盛り上がってきたぞと。で、あとはもう一歩。そこに別の人たちがいて、企画もあって、プロデュースもできて、そういう人材が地域に一人でも入ってくると、組み立てながらやれるんですけどね。とにかく、そういう人材がいない。

グリーンツーリズムで 食べているのか？

九州もグリーンツーリズムの先進地というふうにはみられてますけど、10何年前からですかね。ちょうど九州で立ち上がった、阿蘇の坂元さん、安心院の宮田さんとか。グリーンツーリズムの産声を上げさせた人たち、僕もその一人なんですけど10何年たって、確かにメディア上はツーリズム



といえだいたい広がってきてるし、国の事業的にも広がってきてるし。ところが本当にそれで食えてるのかということですよ。新しい人材を入れるまで、そこで食えるのかと。

生きがいがづくりのグリーンツーリズムは確かに今どんどん広がっているけれども、産業づくりとして独立するのは本当にやれてるかということ。点ではあるんですけど、線でつながってない。だから、地域の六次産業化で何とか活性化することについては、これからかなという風に思います。

今までの15年は啓蒙の時代だった。農水からグリーンツーリズムという言葉が出て、環境省からエコツーリズムという言葉が出て、国交省からツーリズムとか体験型観光とかっていうのが出て、だいぶ啓蒙してきました。これから何か実践の時代になっていく。実践する時にどうも地域の人たちだけだと、僕の結論はつらいぞと。町の人たちの応援団みたいな組織といった、新しい人が入っていかないと、なかなかそこがもう一歩抜けられないんじゃないかなというので、僕も今やってるんですけどね。

課題はどこにでもある

課題は、どこでもあるんですよ。別に島に限らず日本の村々って、基本は町の人たちとウェルカムで交流して、泊めて、飯食わせてっていう文化が基本的にはそんなにあるわけではない。せいぜい祭の時は無礼講で一緒に入ったりしますが、やっぱりそれはある意味、想定範囲内というか。

でもそこは、誰かが仕掛けていかないと、以前ほどはそのバリアって強くないんですよ。それはなぜかっていうと、地域自体がだんだん弱体化してるからなんです。高齢化、若者がいない、いろんな課題が見えてきて。言われたかないけど限界集落って言葉がメディアを通じて出始めて、自分たちは関係ないぞと思っているけども、実際市町村合併で小中学校が統合されて、廃校になってるぞと。廃校になった瞬間に、やっぱりなんかさびしくなったぞとか。役場の駅前が一番盛り上がったのに、役場も統廃合されて、支所扱いになって役場の前の商店街のシャッターがどんどん下りてくるぞと。というのがここ10年、まざまざと感じますね。その前の10年に比べて加速的にそういった傾向が出始めてるんですね。

ただ、今までは何とか自分たちだけでやっていけるぞ！！っていうんだけど、これはちょっと一回、町の人たちも、考えなければいけないじゃないかと思うのが一部で始まっているんですよ。だから昔に比べると、その垣根は、若干仕掛けようによっては、越えきれない壁になってるんじゃないかな、バーが下がってるんじゃないかなというように思います。

地元の若者は一度外に出たほうがいい！

若者は基本的には僕は一度外に出たほうがいいと思ってるんです。一回外に出た人間じゃないと本当に見えないですよ。

僕もそうだったように、田舎にずっといたら、田舎の良さがわからないし、町の人たちの思いもわからないし。そういう意味で若者はどんどん、一回外に出ると、一回出て、多分、都会には寒風が吹きさぶってますから、そうなった時に、もう一回帰るところとしてみてもいいじゃないかと思えます。その時に帰るところにお仕事がないと帰れないじゃないですか。そこをどうやっていくかです。

だから今いろんな省庁が雇用の受け皿として農村の可能性という話をしてるんですけども、多分そんな簡単なものじゃないです。町の人たちが明日から入って農業で食えるかっていったらそんなわけない。農業で食えないからみんな出て行ってるのに、また農業でっていうのはすごく安易な発想で。そのためには農業＋Xみたいな何かがないとダメ。それがツーリズムだったり、加工品をもっと売っていくことだったり、もうちょっとやりようによってはまだまだ可能性はあるんですよ。莫大な事業は展開できないかもしれないけど、自分が食う、月十数万くらいの金額であれば、やりようによっては農村はまだまだやれますよ。

例えば、ある湯布院の、農家に嫁いだ女性がいる、彼女はたまたま九州農政局の職員だった。結

婚を機にやめて、当然農業やったことないぞと。それが有機農業やってる旦那のところに入ってたんですね。彼女はいきなり農家の嫁として、いろいろやるんですけど、そのうちに農村の中には捨てられてる野菜があるっていうのに、気づくわけです。じゃあ、農家のおばちゃんと交渉して、彼女がその野菜を集めてきて、自分でデザインして簡単な似顔絵なんか書いて、自分でパッケージしてデザインしたラベルを貼って、人が集まる亀の湯とか玉の湯とか、そういうところも含めて売り始めて。気がついたら20～30万になっちゃってるわけですよ。湯布院だからっていうのもあるけど、やりようによっては別に自分が農業で野菜を作るだけじゃなくて、周辺につなぎあわせればまだ、小さなビジネスって、結構可能性としてはあるんですよ。だからそんなやり方をどのくらいこれから積み上げていくか。その時に町側に一回出た人間のほうがそれに気づきやすいですよ。

ツーリズムの資源の組み合わせなんかもそうですけども、街側の気持ちになって自分が都会にいた経験、感性を持って地域に入ったときに、ここはもっとこうしたいほうがいいんじゃないかという組み立てができるんですよ。

その地域に入り込む都会の視点を持った人材っていうのは、最初から大きなビジネスをやらなくて小さな生業でも入ってこれる人じゃないと入ってこれないじゃないですか。そのために一つはまだ結婚していない若者がいいんですよ。まだ、配偶者もない若者。今、外国の海外青年協力隊なんかに興味があるような若者。やっぱりちょっと意識が高くて、社会貢献とか何かやっていきたいなと思ってる若者。資本主義中心の日本の現在の中で、社会に対してやっぱりすごく疑問を持っているような若者。こういう若者なんか、僕からすると、海外もいいけど、まず日本の村々を手伝ってくれよ、みたいなこと考えますね。

もう一つが、団塊の世代の、ある程度大手企業を定年退職して年金をもらっている人たち。退職金もそこそこもらってるから、あとは生きがいづくりでボランティアでも良いから何かやりたいと思ってるこういう人たち。この人材はひとつ可能性はあるんですね。

3つ目が大手企業じゃなくて、自分で、起業して何かやってきたような人たち。この人たちは二地域居住の中で農村に入ってもらいたい人たちですよ。今、企業誘致の時代は終わって、起業家誘致の時代、結構仲間内でそういう話をしてるんですけど、その起業家が一人地域に入るだけで、可能性が広がる。ただ、地域側からすれば、彼がどっぷり地域に入ってもらって有効価値がないんです。生活の基盤は都会にある方がいい。

効果的なのは、彼が片足農村、片足都会に突っ込むことによって、彼のネットワークの中で自分と村と町の情報発信をしてくれたり、自分たちの産品も買ってもらったり、彼のネットワークでたまにこっち側にツーリズムで来てくれたりと。そ

ういう活用がすごく期待できると思うんです。

村のハローワークの鍵は情報発信

僕は村のハローワークって言ってますけど、やっぱり情報発信が大事だと思ってます。そこがどんな地域なのかの情報発信。あと、最終的に受け入れてくれる組織がないといけません。組織をゼロから立ち上げていってハードル高いじゃないですか。だから受け入れるための組織が、例えば地域の中で直売所だったり道の駅だったり、交流施設だったり、加工グループだったり。そういうところをきちんとしないとたぶんやっていけないと思ってますね。それも含め、それぞれの拠点のデータベースなりを情報発信したほうがいいと思うんです。自分たちはこんな点で悩んでいると。

つまり、都会の人たちとのお見合いですよ。そのための情報発信。お見合いした中で、じゃあ最初はボランティアでやろうとか。モニターツアーがあったら参加しようとか。そんなところからスタートすることだと思います。やっぱりそれについても、仕掛ける仕組みがあるんですよ。僕はそれをムラたび応援団という組織で、これからやっていこうと思ってるんですけど。なんか最初に、誰かが仕掛けて、そういうお見合いの場を作っていかないとなかなかわからないじゃないですか。

日本人の原点をムラで見直したい

僕のDNAは、宗像大社の宮司の息子というのがやっぱりあるんですよ。僕は、大島村というようにいわゆる漁村にしる、田島っていう農村にしる、親父の仕事の関係でずっと小さいときから大学3年まで、そういったムラのなかで暮らしていきんです。ですから、結局、今、何故ムラがいいかという、ムラは日本人の原点だと思ってる、自然との関わり方とか自然との調和の仕方とか、日本人が本来持っている特性ってあるじゃないですか。そういうものがムラにはある。

日本人の特性でいくと、例えばヨーロッパの人みたいに、自然は征服できるんだと、そんな驕った考え方はなくて、台風になぎ倒されたり、地震ですごい状況になったりしてこれだけ自然環境が厳しいところもないし、その反面、自然に恵まれて四季折々、これだけ色があって、農産物も豊かに実って。これはある意味世界的に言ったらすごく恵まれているじゃないですか。雨が降らなくてどうやって農産物を作ろうかって悩んでるところに比べるとこれだけ高温多湿な環境の中で、かなり恵まれている。それでいくと、自然に対する恵への畏れと感謝の気持ちが日本人の中にあるわけです。それが神社の世界でいうと「祭り」ですよ

ね。神と一緒に収穫を祝おうじゃないか。それが僕は日本人の特有のものだと思ってます。

その日本人の原点をもっていれば、たぶん環境という言葉を使わなくても自然に環境に留意するとか環境に優しいとか、そういう暮らし方になっていくわけです。もったいないという言葉があるということも含めてそう思いますね。

ところが、どうもあまりにも高度経済成長を短期間でびゅっとやっちゃって、ここの感覚が今、切れてて。僕も、東京に10年くらい住んだんですが台風が来てもわからないんです、ビルの中で仕事してれば。台風情報で帰りの電車がどうなのかっていうのは一応見るけども、まあ下手するとビルの中で仕事してて台風が通過してしまうわけです。そういうことが何十年も続いてくると、自然への価値観みたいなものが、どんどん薄れていくんですよ。それを思い出させてくれるきっかけとして、僕は、ムラがすばらしいっていうか、もう一回ムラの中で第一次産業をやっている人たちに目を向けて欲しいんです。

そうすると、彼らは一番自然と対話して自分の食いぶちを作ってきてる人たちだから、彼らの言葉で語ってくれるわけです。それは大学の先生が授業で環境学習やるよりも、腑に落ちるんです。

本当はムラの人々が町の中に出歩いて行って、そういう場面を作る形がいいんだけど、やっぱり街の人から地域に入ってもらって、そこでムラの人々と交流して、一番良いのは農家民宿に泊まってもらって、そこで飯食っているんな体験をして、彼らとなるべく話すことが必要だと思ってるんです。ですから交流できる場面をどう作っていくか、それを僕はやりたかったんです。

その原点はやはり、日本人の自然観とか自然とともに共生する民族という根っここのところを、もう一回忘れかけてる人たちに、つなげるための仕掛け作りが必要なんです。

地産地消にも コーディネーターが必要！

ある意味何も無いところっていうのはツーリズムの視点でいくと、逆に手付かずの自然が残っていたり、何も無いっていうところは実は農林漁業がまだ、かろうじてあるところだったりするわけです。農林漁業が残っているということは、少なくとも食材はあるわけです。いま阿蘇なんか議論してるのは、観光客は年間1800万人くらい来るぞと。そこで旅館、ホテル、いろんな飲食業、いわゆる観光協会に付属している飲食を中心とした施設があるわけです。でも、そこを訪れる人たちは少なくとも食事について、だんだん不満を持ち始めたわけです。せっかくそこまで行って地元の旬な食材を使った料理が食いたいぞと。でもいつも同じような、あそこの旅館に泊まっても似たようなものしか出てこないぞと。でもこれはチャンスなんです。今、飲食店、旅館、ホテルの

人たちがムラ側の食材を使うような地産地消を広げられる活動ができれば、少なくともここは活性化するんですね。今までは業者に全部頼っていて一部の業者は潤うけれども、地域の人はあまり関係なかったりするわけです。ここと農産物直売所がつながるだけで、生産者に直接還元されるわけですから活性化していくんですよ。

結局これもつなぎ役なんですけど、今、世の中のニーズ自体がだんだん農村側に対してプラスになるような傾向にきてるんですね。あとはそれを理解した上でどうつなげていくかということ。ムラの人たちからはなかなかこちらにはよう行きらんのです。

ですから、こういう間をとりもってコーディネートする人材が一人いるだけで、どんどんつながっていくんですよ。

こうなったらコーディネーター を全国公募するしかない

行政マンもそこにおいて、行政マンの力量の中でいろんな事業をひっぱってくればいいんです。彼らは彼らとしてせっかく事業推進者なんだから。いろんな国の事業とか、県の事業とか市町村の事業とか、自分で考えればいくらでもやりようはあるんですね。

また、民間は民間で、自分の仕事の延長の中で関わるところに関わればいいんだし。全部もうちょっと幅を広げてダイナミックな事業体にしたほうがいいかなと思うんですけどね。ただ、そこには必ず事務局長が一人は必要なんです。人徳者が。人徳者、兼いろんなコーディネーターができる人、こういう人がいなくてはいけない。そこは全国公募で入れるしかないかなーと思ってるんですけどね。

それでもやっぱりやる気のあるところじゃないとこういう事業は難しい。行政マンの中でやる気があって、地域住民の中でもやる気がある、これは一番理想系ですよ。でも、極論すれば、行政の中にもやる気のある人がいない。地域住民の中にもいない。こうなるとこれはいかに外部の人間が旗振ってもね、立ち上がってもうまくいかないです。これは正直言って、難しい。ただ、どちらか一人いれば、まだやれると思いますよ。

地域資源・宝探し

その地域に入ればいろいろ地域資源ってあるんじゃないですか。その自然がきれいだとか、水がいいとか、最終的には人がいいとかね。あるいは、その食がいいとか、物語があるとか。その神楽がすごくいいとか。たぶん、入れば入るだけ、地域資源は出てくるんですよ。

まずは入ってみなければ地域の「宝」は見つからない。入れば入るほど地域資源が見えてくると

いうような。

そうなるかどうかということになるんですが、それはご縁。そういう意味では、極論すれば人がいない、やる気のある人がいないところでもその出会うきっかけさえばんぼん作れば、そこに惚れ込んで一方的にラブコールして入っていく人もいますよ。

すごい美人じゃなくても俺にはここだっていうところで、お見合いが成立する場合もある。

そうすると次につながっていくんですよ。ですから、まずは知るためのきっかけ作りを最低でもやっていかないと、知りようがないんですね。

だからそう考えれば、情報発信が大事になるんです。今はいろんなツールがあるじゃないですか。ブログという形でもいいし、SNS機能で、ネットで情報をやりとりすることもできるし、それから感性を持った町の人間がばーっと地域に入り込んでやっていくことだけでも刺激となって、それはきっかけとしてはありかなと思ってるんですけどね。

あとね、入り込みやすいきっかけとしては、祭。祭は地域の人たちがこぞってまだやってるものだし。そのときは町の人たちもある意味無礼講で受け入れる体制があるので、祭なんかもっと情報として出していったらいい。今まで祭りもムラだけでやらないかんって言ってたけども、ムラだけが祭りをまわしていきって正直言って今はつらい状態に入ってきてるところが結構あるんですね。

そこは一部、町の人たちも、ちょっと旗くらい持たせるとか言ってですね。できればご神事から参加する人に、来年はここまで参加できるぞとかね。祭をきっかけにっていうのはありかなって思います。

これからの九州活性化の可能性は？

九州は、多いですよ熱い連中が。しゃべりはじめるととまらないくらい熱い！

九州の可能性でいくと、土地柄やっぱり熱いんでね、こういう熱い人材がいるんです。

そういう中で僕は可能性がすごくあるなっていうのが、農業がまだね、しっかりしてるんですよ九州は。国レベルで見たときに、日本のほかのエリアで見たときに、やっぱり九州って農業立国。漁業も含めてまだまだ戦えるぞと思っています。

それからいわゆる観光と農業との連携で考えていくと、すごくそこで通じる仕掛けを、仕掛けやすいんですよ。まず東京の人たちは九州には意外と来てないんですよ。まだ来てない人がいるということは、マーケットはそこにうじゃうじゃまだ可能性としてはあるんですよ。ただ、悲しいかな、どうしても距離がある。交通アクセス情報はなんとか今これだけ発達してるんで、情報網をうまくとりまとめてやれば東京にストレートに入り込めるんだけど、こっちに来るときの飛行機

代とか、そこから先の高速代とか、これは地域住民や、仕掛け人コーディネーターがいくら頑張っても、いかんともしがたい。もっと国家レベルでやらなくちゃいけないと思います。例えばですけど休みをもうちょっと多くしないといかんとか。そして、もうちょっとアクセス条件をなんとかせないかんとかですね。そこをやり切れさえすれば九州はツーリズムの場所として、すごく可能性があるあるんですよね。

また、アジアと近いということで、アジアの人たちへも、第一次的には昔の観光大型バスで、というような集客方法はあると思うんですが、その先はもうちょっと個別旅行で、観光事例がないところにツーリズム的な要素を盛り込んでいきたい。そういうマーケットはまだ九州には可能性あることとして控えてるんですね。でも逆に、そこに一気にきてもらおうと逆に農村はつぶれてしまうからまずは日本人の中の意識の高い人たちが入っていて、そこでムラの人達に徐々に慣れてもらっていった受け入れの意識もあがって体制もできた段階で、次は、アジアの人たちが大型観光バスのツアーからもうちょっと個別のところも入れるようにというマーケットは、うまく仕掛けていけば十分に可能性があるかなと思ってますけどね。

あとは九州はいままで10何年やって来た人同士が、けっこういい関係でみんなつながってるんですよ。ですから、九州というこの場所は、ツーリズムでつながっている強い結びつきを持っていますから、何かやる時には電話一本で動いていけるんですね。そういう意味でネットワーク力は大きいかなと思いますね。



養父さんとお話していて、とても印象に残ったのがやはり「コーディネートできる人材がない」ということと「その人材をどう確保していくか」という点である。グリーンツーリズムを通じて痛感しておられる養父さんのその指摘は、まさに、エコツーリズムの世界においても当てはまる緊急課題である。そのためにはやはり「地域からの情報発信」が必要である。また、それをキャッチする人々にどう届けるかも課題である。どのように「ムラとマチ」を「つなげて」いくかが鍵。

また、お話の中に、日本人が本来持っているはずの「自然への感謝と畏れの気持ち」というのがあるが、これもまたエコツーリズムの世界にとって必要な要素である。「自然への感謝と畏れの気持ち」これもまた人間と自然との「つながり」を理解する感覚である。

ご指摘のように、グリーンツーリズムもエコツーリズムも根っこは同じで、地域環境の上に成り立つ人間と自然との共存というステージの上で展開されるものである。そういった意味でも「自然への感謝と畏れの気持ち」は忘れてはならない。

九州は熱い人が多いとおっしゃっていたが、確かに今回お会いした人たちは熱かった。こういう人々がいる限り、九州での地域活性の芽は伸びていくと思う。

地域活性にとって大切な事は「つながり」をどう感じていくかということ。

「ムラの地域の皆さんと生活圏自然環境」「都会の人間とムラの人間」「都会の人とムラの自然環境」「ムラの人と都会の文化」「ムラの食材と都会の人」あげればきりがなが、実は皆、つながっている。

この「つながり感」をどのように感じていただき、多くの人々に「自分とのつながり」の意味を伝えていくことができるかということが、地域活性を推進していく上でも、また、環境保全を推進していく上でも大事なことであるということを、今回の九州取材を通じてあらためて感じた。

聞き手 鈴木順一郎



九州・地域活性のキーパーソン

NPO 法人安心院グリーンツーリズム研究会 宮田静一さん

全国に唯一「心」が真ん中にある町
その気持ちを大切にしたい。安心院町グリーンツーリズム研究会 会長
宮田 静一1949年 大分県宇佐市生まれ 日本獣医畜産大学卒業 営農（ぶどう栽培）1992年「アグリツーリズム研究会」を発足
1996年「安心院町グリーンツーリズム研究会」を発足、会長に就任。「大分県グリーンツーリズム研究会」を設立、会長。

農家や商工会、役場の職員や学校の先生、主婦や学生など、町内外に住む人々が集まり誕生したNPO法人安心院グリーンツーリズム研究会。農村に滞在し、自然や文化、食や暮らしを体験する「農家民宿」や、地域の文化を保存・継承するなど、様々な活動に取り組む。日本におけるグリーンツーリズムのさきがけ的存在である宮田さんに、組織立ち上げの経緯と安心院の魅力について伺ってみた。

安心院グリーンツーリズムを
立ち上げた理由

一番最初はですね、もともとは平成4年から始まっています。それでももう17年目になるんですけどもね。この時アグリツーリズム研究会というのを県のシンポジウムあった時に声かかって立ち上げることになりましたが県のひとと一緒に。その時は県から「みなさん、せんかい」ということで立ち上げたのがアグリツーリズムでした。だからこれは自分の意思で入ってなかったことなんですけどね。

この時はね、私はメンバー集めたけど、宣伝しないですかって言われて、その時初めてアグリという言葉聞いた。言葉としてね。自分の意思じゃなかったけど、県の担当者が一年間一生懸命やったおかげで、2年目は農家の何人かが集まって勉強会したんです。それは県の自主研究会。そのあと2年間泣かずとばずで続いて、3年か4年たった時に安心院グリーンツーリズム研究会を立ち上げたんです。

安心院はぶどうの町です。私が、37年前かな大学4年生のときに、ぶどうを始めたんですけどその時約350軒近くぶどう農家があったんです。でも、ちょうど今から10何年前ですけど、半減していました。その中でもブドウの灯を守ろうっていう動きもありました、同時にですね。そういうのも重なったわけです。

私はブドウをかなり本格的にやっています。3ヘクタールやっていますから。それで、やっぱり若い人が振り返るような農業をしよう、そういう思いもあって、そのようなことが重なって、その安心院グリーンツーリズム研究会を立ち上げたということになります。

それでも結局農業は衰退

私が37年前始めた頃のね、その頃っていうのは、静一なんてバカじゃないかっていわれました

よ。大学までいって農業するんかって。親戚からも同級生からもバカやねんか！って。ずっとそういう感じだったもんね、立ち上げたころ。いつかジャガイモが一個100円になる時代がくるよとか当時はすごいこと言ってましたけど、そうはなっていないね。それでも私は、今では11ヘクタールの土地があるんですけどね、そん中でブドウ園をね、自分にしてみたら一生一度のチャンスだと思ったんですよ、そんな時はね。思い切って頑張れる自分たちは力が燃えていられると思ってここへ入ったんですけど、それでも、親戚とか同級生もね、静一ばかやねんかっていう感じで見られてました、当時から。まして、今なんか20代の農業青年が安心院に2～3人じゃないかと思えますよ。これは、はっきり言って、この国はおかしいですよ。

安心院グリーンツーリズムを
立ち上げてみたものの・・・

グリーンツーリズムを立ち上げるという意味でどういう終わり方をしたらいいのかなって思ってた。全然目標がなかったから。始めた時言葉としては聞いたことあるけどグリーンツーリズム。その言葉が出たばかりのころだったし。朝日新聞の記者が言ってたけど、あの当時のグリーンツーリズムは宮崎県綾町の、広葉樹林っていうか、ああいう林を作ろうとかね。長崎の方だったかな、おばちゃんたちが集まって、加工品を作るっていうりとか、そういうのがその、当時のグリーンツーリズムっていうのかな。

で、私たちが立ち上げてるっていうのが、基本的には農家の一軒一軒の足腰を強くするっていうのが第一目標でしたしね。だから、わかんなかったです。どうしたらいいかなっちゃうことで。だけど、うちの研究会っていうのはですね、月々4千円5年間積み立てで、13年前にヨーロッパ研修っていうことでドイツに行ったんですけど、これだー！って思って帰ってきた。もし行っていなかったら頑張れなかったと思えますよ。



(写真提供：安心院グリーンツーリズム研究会)

ドイツの村の「衝撃！」

そこは人口6500人の町でした。アッカレンっていう村なんですけどね。市の名前がフォクトブルグっていう市なんですけど。そこに7つの村があって、その市長さんにですね、私が「どれだけの人がこのグリーンツーリズムに関わってますか？」って質問したら、市長は、おーって手を広げて、あきれた感じで「100%です！」って。私も驚いたんですが、私よりも市長が私の質問に驚いた感じで、そういうことを聞くのは同じ敗戦



国の仲間だっというのに意外だったんですね。

日本人への信頼はあるんですけど、ほんとに驚いた感じで「100%です！」っていうふうにな。あーと思った。そしてね、私のすぐうしろに一緒に行った日本旅館の女将さんが「私らみたいな専門の宿泊業、どうして守るんですか？」って聞いたたら市長は即座に言いましたよ「守れません」って。「基本は農業なんです」ってね、あの国は。それで改めて思ったのは農業をやっている人を守るっていうことが大事。

今でも印象に残ってる。市長があきれた感じで「100%ですよ！」って。聞いたたらあの町はですねグリーンツーリズムの総売り上げが、当時の日本円で約32億円くらいあったそうです。その中の、約10億円、3分の1が農家の宿泊料になるんですね。驚いた。あとの20億円はその地域のレストランとか、農産物直売で、あるんだね。だから、う

ちも泊まったお客さんが農産物直売を買ってくれたら、助かるっていうか。グリーンツーリズムはやっぱり、例えば時勢の流れがあれば、一つは農家民泊、もう一つが農産物直売であるっていうか、だからもう、あの答えを聞いた瞬間「これだ！」って思いましたね。

それから調べたドイツのグリーンツーリズム

その後ちょっと調べたんですけど、ドイツには8人泊めるまでは許可されないみたいなんです。8人までは税金とらないんですよ。そして知り合いにドイツに過疎はないんですか？って聞いてもらったら、訳せないのね、言葉ないんです、本当に。最近もう一度大学の先生に調べてもらったらやっぱりそういう言葉はないということですね。だから、すごい国だなーと思った。バランスよく作ってるんですよ、町を。例えば高速道路を国の真ん中に1本渡して走らせて、そして、1時間以内に総合病院、総合大学に行ける。それから30万人から50万人のね、中都市をバランスよく配置した。すごいなーって思った。

そうはいつでも「安心院」はドイツじゃないですね？

果たしてこの安心院でできるかっていうことはまったく考えなかった。とにかくドイツを目指そうと思ったんです。そう思えば頑張るんですよ、自然に。

最初の時の、アグリツーリズム、グリーンツーリズムを立ち上げる時は、何人かに声をかけて回りました。そのあとは自然ですね、人がだんだん集まってきた。たぶん新聞とか、たくさん記事として扱ってくれたから。新しいことが起こるっっちゃうかそんな感じで見てもらって。で、私は全然地元の新聞記者のデータに入らなかったみたいで私が出てきたこともびっくりだったみたい。

で、ドイツの要するにそのグリーンツーリズムがやっぱり国の基本は農業という考え方、最後はそこですよ、やっぱり。だから安心院もそこに持ってきてただけだと思った。今はこういう所を限界集落と言ってるでしょ、ちょっと言葉がよくないけどここは安楽死集落やな。こういう国作ったのは国には悪いけど間違いだと思う。ドイツと比べたらね。あまりにお粗末ですよ。

それで農家民泊を始めたんだが

でね、農村民泊っっちゃうことを最初始めたんですけど、最初やってすぐ思いましたね。あっこれは、法的な壁っっちゃうものがすごくあるなって。農村民泊に対しての法律の壁ということですよ。

とりあえずこの家で人を泊めるっていうことは普通はできないよね。泊めてお金をもらうのはできないけどとりあえずやってみよう。で、一応です、最初は保健所が怖いですからね。県の私の同級生にどうしたらできるのかっっちゃうの聞いたたら、実験的ならできるって。それで第一回目は実験的にやりました。

まずキャッチフレーズを考えた

そうね、最初はキャッチフレーズ何にしようかって考えた時にね、たまたまなんか文章のなかで「命の洗濯」ちゅうのがあったけど、「命の洗濯」は、なんか聞いただけで疲れるって思ったんですよ。だから「心のせんたく」かなあと考えた。それでキャッチフレーズ「心のせんたく」ってことでずっとやってますけど。「洗濯」と「選択」っていう2つの意味を入れてます。

その時からうちの場合は農村民泊っっちゃうことで始めましたね。



会報誌 心のせんたく
(写真提供：安心院グリーンツーリズム研究会)

町が宣言

13年前立ち上げた1～2年後ですかね。町のGT宣言が始まりました。その時、農林水産省がね安心院に来てました。町長が言ってましたけど、グリーンツーリズムだけや国からこっちにくるのは、それまでは全部俺が行かんといけん、なんでもかんでも東京行ってせんといかんけど、グリーンツーリズムになると、東京から来てくれたが。で、どうしようかっっちゃうことでやったんですけど安心院の思い、伝わってたんでしょうね。

立ち上げてすぐですね、朝日新聞でね全国に3回くらい出ました。その時は役場なんか問い合わせがくるんだけど課も何もなかった。どうしようかって大騒ぎになった。よかったなあと考えた。これは要するに、ものになるちゅうかな、そんな気がした。

抜けてく人もいたが・・・

それから全国で、安心院のグリーンツーリズム

が有名になるんですが、でも、長くやっているとねだんだん人が抜けていきました。これも仕方ないなと思う。だから、これをやる時、やっぱり全国のリーダーの方々は、人は変わるものと思ってやったらいいと思う。そうせんと苦痛ですよ。それに適応することで、継続が可能だということですね。逆にね。

だからね、要するに、ある人が辞めていくことによって、新しい人が入ってくる。それは、自然の流れっっちゃうのかな。たとえば、夫婦だって別れる時があるんだから。ましてこういう新しい運動体は別れたり壊れても当たり前だ。

来る人の数は増え続けた！

来る人の数。多分、もうずっと尻上がりです、ずっとですね。

最初の1年目というのは、イベントの時に来ただけだったんです。ワイン祭りの時とね、あとはシンポジウムやる時に泊りに来ませんかっっちゃうことで人が来ました。あとはもう尻上がりで、一番新しい数がね、中学校や高校生の修学旅行関係が4300人くらい。で、視察研修が2000人来てる。韓国が大半。韓国では今とりあえず安心院に行けてなってるみたいね。評判になってる、安心院のことが。で、一般の方が約2000人くらいかな。

一番くる時期はね、爆発的っっちゃうんじゃないんですけど、5月6月、9月10月ですかね。この4ヶ月間に修学旅行が入ってる。一番いい気候の時なんですよ。で、一般の人が泊まれなくてはみ出たりする。そんな悩みも今はありますけど、仕方ないかなと思う。子供たちが主体になるから。だから、一年間に8000人来てるね。

何が安心院の「魅力」？

一番最初の時から思ったんですけど、この修学旅行の一番最初、地元の分商業っていう野球の強い学校だったんですけど。そこの高校2年生が来たんですよ。その子供たちが320名来ました。で4つに分けて80人ずつ14家庭で受けたんです。その時、1泊2日なのに、子供たちがね、泣いて帰るんですよ。それでびっくりしました。あー、これいいことしてるんだなっっちゃうのと同時にですね、これはひとつの産業になっていくんだなって感じた。その時に。第1回目の時にそう感じましたね。

まあ今の子供たちは、うちもたぶんそうですけど、他人を信じるなっっちゃう教育をしてんの。都会はまして。その打破やなと思った。本来は人はやっぱり信じることから始まるし。

初めて他人の家に泊まってるのほとんどの子供がそん中で初めて話をしていくっっちゃうかね。だか

ら体験っていうのは、やっぱりほんの入り口であって、やっぱり人との心の交流っちゃうんか、このことは積極的にやることかなって思いましたね。

ある大阪の中学なんかね、安心院で2泊して帰った子供が変わるみたいなんです。その学校はもう悪ガキ中学みたいなんだけど。帰った後コロナと変わって評判になってるの。悪ガキがやってきてね、2日泊まって帰ったらね、ころっと変わって大人になるっちゃうんか。

それはね、やっぱり泊まった人たちのね、交流だと思ふ。一軒一軒でみんな違うと思ふし。

私みなさんに言うんですけど、いろんなね、例えば体験とか食事はみんな違うでしょうけど、結果的に子供たちに、心の交流ができるように接してくださいって農家の人に言うんですよ。安心院はいい人が多いですよ。優しいとこだなと思ふ。



(写真提供：安心院グリーンツーリズム研究会)

グリーンツーリズムの答え、それは女性の目が生き生きする事

あの、私が何時間しゃべるよりも、泊まったとこの奥さんに答えがある。グリーンツーリズムの答えは、奥さんたち、女性の目が生き生きすることなんです。

おかあさんたちがいなかったらね、たぶんこれは成り立ってなかったなって思う。だいたい家に人が泊まるっちゃうことは奥さんがやろうというまで出来ないもん。

だからグリーンツーリズムはやっぱり女性が、財布をにぎることだと思ってる。そして、名刺を持つこと。そうすることでおかあちゃんたちの目が生き生きとしてくる。これがほんとに大事なことなんだね。

農家は名刺を持たなかった！

持ってないですよ名刺なんか。農村の奥さんは持ってない。お父さんも持ってないですよ。だから女性には名刺を持ってもらって自分の家の宣伝するとか、町の宣伝をしてもらっちゃうことですよ。うちの中では女の人は7人くらい講演できますよ。そのくらいもう完全に主流になってる。

奥さんは講演できます、自分の体験をずっとしゃべれるからね。今はお父さんと立場入れ替わってます。でも入れ替わったほうがいいですよ。入れ替わらんとだめですよこのくらい立派に。

ある奥さん言っていましたけど、出身はどこですかって聞かれたらね、安心院っちゃうのは恥ずかしくて言えなかったって。今は胸張って「安心院です！」って言えるって。それは最大の効果だからね。グリーンツーリズムと関係ない人たちにもですよ。看護婦さんなんだけど。今は自信持って言ってる「安心院です！」って。



(写真提供：安心院グリーンツーリズム研究会)

田舎ぶりがいいほうが勝ち！

私ね、田舎ぶりがいいほうが勝ちって言ってるんですよ。

例えばね、その、普通でしたら、こういう過疎の農村で、新しい経済を起こすときに、普通負けだわ、やる前は人がいないだからと思ふ。だけど、こればっかしはいかにも田舎に住んでるっちゃうほうが絶対うけるわけなんよ。子供たちが感動するわけなんよ。だから、中途半端に町化しないことなんです。そういう意味ですよ。

徹底的に田舎のほうが、来た時にそれ以上感動するんよ。それでまた来たくなるんよ。



安心院に行ってみると「何も無い田舎ぶり」がすぐわかる。よくもまあこんな田舎に年間8000人も人が農家民泊で訪れているなあとあらためて驚かされる。肩肘を張らない農家体験がいいのかもしれない。確かにエコツアーを例に考えると「お勉強」的なツアーが多いのが気になる。体験は自然と触れ合えていいのだが、ガイドには専門性が要求される場合が多いため「お勉強」的になるのだろうか。

安心院で学んだことは、肩肘張らずに、人と人が触れ合うことだ。周りには自然しかないから、さらに人と人が触れ合いやすい。だから田舎ぶりがいいほうが勝ちなのだ。しかも、おかあちゃんたちが元気なのは大変いい。仕事柄、これまで全国を取材してきたが、確かに「おかあちゃん」たちが元気なところは「地域も元気」だ。

しかしながらこの安心院も、高齢化が進む。全国に名を馳せた安心院の経験が、他地域に波及することを祈る思いである。

最後に、「田舎ぶり」がいいということは、自然を必要以上に壊さないで人が環境と共存するということにもつながる。そういった意味で安心院はエコツーリズムとグリーンツーリズムの交差点に位置するのかもしれない。

聞き手 鈴木順一郎

九州・地域活性のキーパーソン **長崎県平戸市** 国際交流 野外教育 コーディネーター **小関 哲さん** エコツーリズムへのコーディネート **自分が楽しくなければ客も楽しくない！**

コーディネーター 小関 哲
www.nagasaki-islands.org

平戸氏出身の29歳、小関哲氏。United World College 英国校、京大法学部卒。
カナダにて野外活動指導者トレーニングを受け、2004年から国際交流や野外教育の通訳兼企画コーディネートに従事。

米国本部の非営利国際教育組織「ピーブルトゥーピーブル」が2008年に行なった世界48カ国実施の国際研修旅行企画をプログラムコーディネートし、「世界一」の最高評価を受ける。また自身でも平戸市離島での野外プログラムを実践。今回は地域活性に結びつくコーディネートへの考え方・ヒントについて伺った。

僕が楽しいことで地域のために なるのならそれはすばらしい！

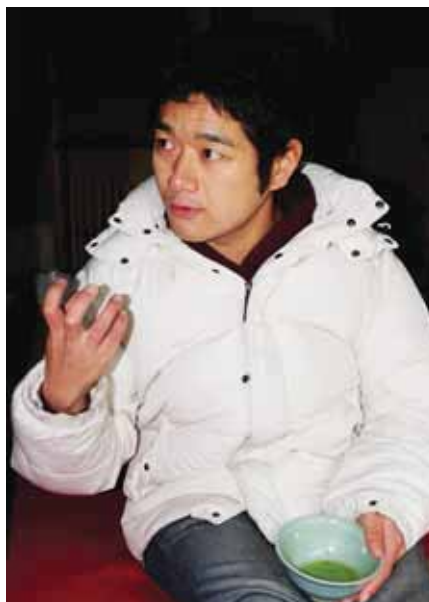
楽しいことって感覚的に楽しいことだと思うんです。それと、僕が楽しいからやって、最近、例えば地域振興っていうお話をする時、説明する時間があれば言うんですけども、地域のために他の活動をやっているわけではある意味なくて、僕がまず楽しくて、僕が楽しいことしか僕はできないし。それが結果として地域のためになるのなら、すばらしいと思っています。そして、やはり人は自分の欲求がある程度満たされているときに他の人の役にたつということがものすごく気持ちがいい。それだけでなくほっとするというか、自分の居場所がそこにあるということで安心できるようになる。僕が楽しさにこだわるので、お客さんにとっても、それが伝わりお客さん自身が楽しさにこだわっていくということで、お客さんも僕も楽しいからそこには共有できる楽しい空間と時間が生まれるんです。やっつけでやっているわけではない。ウソをついてやってるわけじゃないので、お客さんも楽しい。お客さんが楽しければ、その結果としての経済性や地域貢献やいろんな波及効果というのが結果として出てきて、それが自分に帰ってくる。

僕は最近考えてばかりなんですけど、根本的に何をやるうとして何でこれをやってるのかっていうのを考えまして、答えを出さないと次の段階にアクセルを踏めないと思って迷ってたんですね。それが最近答えが出たような気がします。それは「子供の頃と同じように自分にとって大切なもの、大切な感覚、楽しさ心地よさに、こだわっているんだ」と思いました。なので、自分に正直でいられたことが今の自分の仕事がうまくいってる決定要因なのかなと思ったりもしています。

海外での見て感じてきたことを 「おすそわけする」ことが好き

5年前の夏ごろに、僕はとことん旅をしながら自

分の楽しいことを自分が楽しいことしかできなかったんです。今風の言い方をすれば多くの若者がニートとか、フリーターとか言われますけれども仕事からある意味逃げるというか、とにかく僕もニート状態だったんです。2年間くらい僕は逃げて隠れてた。そこで見たり、感じたりしたもの、自分にとって楽しかったものを、帰ってきてからも僕は非常に満足していた。僕がいろんな野山や外国なんかで、人と接したり見たりする様々なものには、現代社会、いわゆる仕事社会が失って今求めているヒントにはなるような経験がたくさんあった。で、それが仕事につながって、例えば美しいものを人に「おすそわけをする」というのが、自分は好きなんだと思ったんです。



名刺一枚からのスタート 気持ちに正直に生きてきただけ

帰ってきてからやったの名刺一枚すっただけだったんですよ。それだけで今やってます。うちは一切そんなコストをかけなくても無駄な看板、無駄な企業、無駄なスタッフがないこと。でも本質的に必要なこと何かっていうノウハウがあって

そのネットワークがあるので、必要な時に必要なことをするだけで、世の中で回ってる定価の10分の1の値段で10倍の価値のあるものを作れるっていうのがあって、少なくともスタートを切れたっていうのは、職業人以前の自分が、一度、根本的に正面から一度逃げて、もちろんその間は飯もないですし、場合によってはつらい。でも、向き合い方っていうのを正直にやれたのが、よかったのかなと思います。

コーディネートが成功実感は 10年先の「活性化」

活性化っていう言葉よくありますよね。逆に簡単に使われすぎるくらい使われている言葉だけでも、活性化って言葉としては、使う人間が問題なのであって、言葉自体非常に正しい。いろいろやってみて活性ってこういうことだなんて思うんです。絵に描いたような活性は、おじいちゃんが喜ぶ、子供たちが喜ぶ、経済というのは非常に重要だと思うんですけども、単純に楽しいと地域の人が思って、みんなが活性してそれが効果になって経済効果にもつながる。

まだ結果が出てくるのが、あと10年後くらいまでかかると思うんですけど、例えば10年くらい後には、今の僕みたいな感じの経歴だったり僕程度の仕事ができる若者が、ごろごろ出てくると思います。そうならなければ、人間は救いがないというか、良い環境世界観に触れて育てて行けば子供たちっていうのは自由に伸びる。僕は自分より若い子たちに、入りやすいような道の下草刈りをしておこうっていう気が結構あります。そんな気持ちでコーディネートしています。

コーディネートの仕事は 「両方の気持ちがわかること」

まず人は、向いてる仕事をするべきだと思うんです。で、コーディネートの仕事なんですけど、これは両方の気持ちがわかる人がコーディネーターという立場に立って、両方がハッピーでリラックスして、交流できて、普段だったらすれちがってしまったり、衝突したりっていうことを通訳して交流につなげる。コーディネーターっていうのは単なる通訳程度にしか見えない場合もありますけど、通訳だって正確に通訳してるわけじゃなくなくて、Aさんが言ったことの中で、その人が本当

に伝えたいことを伝えて、それでBさんをハッピーにすることだけを考えて通訳する。状況によってはジョークなんか全く変えたりして。それくらいこの人とこの人の本質的にいいところが出会うような通訳をする。出会い方から、場から、対話から、ジョークから、含めて、すごい数、両者の間を心理的に往復する。っていうのが僕らの通訳だったりコーディネーターの仕事だったりするんですけど、それは両者のことをわかる人にしか絶対出来ないんです。言語的にも、文化的にも世代的にも感覚的にも。

僕がこの仕事をできてるのは、一つは僕が海外でいろんな人と深く交わる体験ができたっていうのがあると思う。同時に僕はこっちで子供の頃から魚をとって育ったり、この田舎の人たちの中で本当に今では珍しい昭和の最後の少年育ちをした最後の世代だと思うんです。それが今の仕事につながってます。

一言で言うと、コーディネーターっていう職業は、仲介者というか、両方の気持ちがわからなければ産業として絶対成立しない。なのでボランティアだったり地域の人だけでも無理だし、都会からやってきて地域に溶け込んだ人、あるいはその地域から出てよそに行って帰ってきた人、そういう経験をした心理的なバイリンガルじゃないとできない。バイリンガルがない状態でやるとものすごくお互い疲れて、あるいは、お客さんがコーディネーターに合わせて疲れるか、あるいはこっち側が合わせて疲れて、しかも結果が出ないっていうことが大きいかなと思います。



(写真提供：小関氏)

本気でやらなければ評価されない

イベントに人を呼ぶというのは、祭りの要素で「今度はあんなに楽しかったからまた参加しよう」という気持ちを起こさせること。

さっきコーディネーターという職業は専門分野が必要だっていう話をしたと思うんですけど、それに関わる人が今までは観光協会だったり行政の観光課だったり、本来中間支援をする人たちがプロモーションしたりやってたと思うんですよ。

本当の意味でのプロの観光、あるいは交流促進をする、例えば専門的にトヨタが車を作るように、人を出会わせることを職業としている会社っていうのがない。

例えば旅行会社勤務者のほとんどがそうかというところではなくて、あそこは旅行準備のアレンジをするところで、実際にその空間で活動する人たちではないわけじゃないですか。今必要なのはそれを職業とする人だと思うんです。

ただそれをやるにしてもご飯を食べられないのではいけない。ですから片手間ではなくて、生活と情熱の両方かけなきゃいけないわけですよ。情熱がなくても会社に入って生活保障されるならいいですけどこのコーディネートの仕事はそうはいかない。よっぽど情熱がないとそこで生活が保障されない。そこまで真剣になればそれが伝わりまたお客さんは来てくれる。そうするともっと広がってもらおうっていう工夫をしますから次につながる。生活がかかっているか、かかっていないかっていうのは、相手にどのくらい情熱が伝わるかどうかにおいて非常に大きなことだと思うんです。本気かどうかでこと。

必要なのはプロだってことです。自分の生活と情熱をかけて。例えばアメリカからは800人来ましたから本当に情熱をかけた。それで非常に評価が高かったんですよ。それだけ高い評価をいただいた理由は本気で考えたこと。本気で考えると無限に出来ることがあるんですよ。それは、アイデアだけというのではなくて本当に生活をかけてやるかやらないかの違い。

補助金がなくともやっていける よりどころは「完成度」の自信

あと補助金も今、いろんな地域活性の話をするとうすぐ補助金という話になっちゃうんですけど、本来的にそういうものがなくなっちゃって、例えばトヨタやソニーが新商品を作るとき、補助金を基本的にはあてにはしませんよね。それと一緒に、僕はトヨタやソニーくらいのプライドと、意識を持ってやればいいじゃんっていうつもいます。僕たちは、物じゃなくて時間をつくりますから、あの時間の完成度に関しては、規模も小さいし、まだま



(写真提供：小関氏)

だ未完成などころはあるけど、あの時間の中で人を感動させて、その人の思い出にするっていう意味で、その完成度の高さは、僕たちが持つてる唯一のよりどころなんです。

環境への配慮は当たり前

環境を食べ物からみても、僕らにとって環境ってそこで獲れた鯛とかサザエとか皆食べますし、小さいころから海で獲れた新鮮なものを食べてきましたので、当たり前環境は大事なんです。僕にとって、環境は食べ物でもあり、癒しであったりします。環境に優しいとか環境が大事っていうのは本来言うまでもないこと、空気が大事ということと一緒にですね、それがそうじゃなくなったけれど、気づけばまだまだ、いいものってかろうじてたくさん残ってはいると思うんです。

小値賀島で野外体験教育をやってきましたが、ここにいる漁師の人たちも最初はとけ込むのに時間がかかった。見るからに荒々しく強そうな漁師たちは平気でタバコを海にポイポイ捨てていたんですよ。でも僕たちが真剣にやっていることに気がついてくれて、今はいろいろ協力してくれます。タバコも捨てなくなった方もいます。押し付けではなく自然にきいてくれたのが嬉しかった。

人が本当に安心するのは 里山・里海

人が感動する自然ってよく言われる話ですけども人が美しいとか感動するのは二種類の環境があって、一つはものすごく美しい景観。もう一つが基本的に田園風景とかこんなところ（平戸）って感動したりする。人間同士が一生懸命一緒に生きる風景のほうが、安心したりすると思う。本当の生の自然って言うのはたまたま美しいっていうふうに見えますけど、人を拒むような、寒さもそうですし。もっと厳しい世界ですよ。怖いですしね。自然って言うのは、その中でキャンプなんかしていけば、ほんとに怖い。僕はカナダの山の中で一人でキャンプしていた時はほんとに怖かったし厳しかった。

だから人間と自然というものがずっと何千何万年って一緒に生きてきた共生の里山や里海は、安心するんですよ。生理的に。人間同士が自然の中で自然と共生しながら一生懸命一緒に生きてる風景は安心する。

だけど今、生理的な安心感っていうよりも自然が全くない状態、例えば大都市のビルの中で安心するのは、人類史上で非常に今異常なこと。今日本人の90%が非常に都市的な暮らしを求めています。この平戸だってそうなんです。東京から来られたら自然だらけですけど、平戸のこのへんの普通の僕ぐらいの人たちっていうのは、自分のアパートから出て、例えば市役所に勤めているとすると、東京と同じような部屋に住んで、アパートでクルッとロックして、車でびっとでて、i pod 聞きながら行って、車ばっと止めてコンビニでって生活なので。そういう意味では日本人の90%っていうのは、そういうライフスタイルになっているので、僕らが本当の意味での自然をもっと見せたいんですけど、まだそこまではしていない。でも、ちょっとしたことで喜んでもらえるし、逆にあんまり無理強いすることをお客さんも望んではないし。なかなか環境を感じてもらう、自然を感じてもらうのは奥は深いと思いますよ。

こういう仕事が当たり前になって欲しい

一言で言えば、これが仕事として成り立つ、飯が食えることが大事ですよ。そういうエコであれなんであれ。それを仕事として多くの人が本気で取り組むようにならなければだめなんです。

例えば日本が今20世紀で車の輸出大国になれたのも、たくさん企業ができて、たくさんの人がそれに対して本気で毎日エネルギーを使っていたから、物とか機械を作るのが上手になった。そしてうまく使った。

そんなふうに僕がやってる野外教育的なことは10年後20年後全然珍しくなくなって当たり前になっているっていうのが一番理想の願いですね。



(写真提供：小関氏)

「エコツーリズム」 にはなりたくない！

僕たちの仕事の成功要因のひとつが、一番リーダーの僕がこの年でしょ。それこそ18くらいの非常に優秀なやつはいくらでもいるし、見ただけで心がまっすぐでなんてすばらしいんだって思えるような青年、20歳前後の男の子の子女の子が活躍しているんですね。で、その子たちが、いい意味で若いってことはどういうことかっていうと人は年をとったり、社会的地位を持てば持つほどエゴを振るいやすくなってしまおうと思うんです。若いってことは、何も持っていないし、いい意味で謙虚ですから、あの子たちが一生懸命、地域の大人に対しても、お客さんに対しても、心から誠実に接していく姿勢が、僕らの仕事をエゴイスティックじゃなくしてるんじゃないかと思います。



一見、朴訥でどっしりした印象を受ける小関さん。しかしながらお会いしたときには憔悴しきっている様子だった。というのも、短期間で野外教育・国際コーディネーターとして有名になってしまった彼にとって世の中との温度差が大きすぎたかもしれない。

インタビューにもあるが、純粹にまっすぐ素直に自分にとっても相手にとっても楽しいことをやってきただけの彼にとって、何故、自分が注目されているのか困惑したのだろう。後日、電話でお話したときには、すっかり元気になっていた。

インタビュー内容を見る時、抽象的な印象を受けがちだが、彼の報告書や考え方を書いた文章を拝見するとかなり綿密に計算し考えをまとめている。しっかりした若者だ。

現在、海外の旅行者（研修者）を受け入れる国際コーディネーターとしてますますの活躍ぶりだが、幼少期からの地元平戸での自然体験が現在の指導の糧となっており、原体験としての自然教育の大切さにはあらためて驚かされる。感性においても、アナログ面とデジタル面を兼ね備えており、使い分けも正確である。

こういった若者の今後には大きな期待を寄せたい。新たなエコツーリズム構築の起爆剤として注目する。また、逆に、こうしたすばらしい「芽」を摘み取らないようにするためにも、彼のような職業が、彼の言うように、当たり前の職業として成立することが、エコツーリズム社会の構築成就の証明になるような気がした。

聞き手 鈴木順一朗